

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

小学校高学年の児童が学級において自分の意見や考えを自由に表明することが難しくなるのは、発達段階特有の現象であると同時に、過剰に周囲に配慮し、自己抑制的に振る舞う現代社会の人間関係の閉塞的な傾向も反映している。主体的・対話的で深い学びが目指され、アクティブ・ラーニングの導入などさまざまな学習法の工夫が凝らされている現代の学校教育においても、この児童の自己表出の抑制にアプローチし、学級を自由に発言できる場として組み直すことができなければ、質の高い学びを実現することはできない。

本論文は、自己表出の抑制の背後にある小学校高学年の児童が持つ否定的な主観的自己評価に着目し、インプロ（即興演劇）がこの否定的な主観的自己評価を緩和することができるのか、できるとしたらなぜそれができるのかを明らかにすることを目的としており、現代的教育課題に迫る意義あるものである。

インプロは近年、学校教育、企業教育などにも創造性、コミュニケーション能力などの育成を目的として導入され、注目を集めている。しかし、インプロを用いた教育実践の紹介、報告が蓄積されていく一方で、インプロが学習者に影響を与える微細なプロセスを描き分析する研究はほとんど見られない。本論文は、それを試みる独創的なものである。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文では、質的研究アプローチを採用している。否定的な主観的自己評価は、授業中に非言語的なものも含んで現れ、児童の「間違えたくない」「緊張する」「目立ちたくない」といった思いと関わっており、またそのような思いは周りの人々との関係の中から生まれてくると筆者は考えた。質的研究アプローチは児童の体験を身体的、心理的、関係的側面を網羅しながら包括的に捉えることができるものであり、それを研究の方法として採用した判断は妥当である。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文の前半ではインプロの創始者の一人であるキース・ジョンストンのインプロの理論と教育思想を分析する。そのために、彼自身の著作、彼の伝記、彼のワークショップの様子を記録した文献、インターネット記事、DVD、動画など、入手可能な資料をほぼすべて集めて用いている。

また、児童の体験の分析では、小学校教員である筆者が担任学級でおこなったインプロの授業が対象となる。筆者は学級で長く時間をともにしている児童を深く理解できているが、一方、そのことで児童の体験の分析が主観的なものに陥りやすくなる。それを回避するために、児童の感想文やインタビューのトランスクリプトといったテキストをデータとすることで距離を取り、分析の深さと客観性の適度なバランスを取っている。分析手法においても、恣意的な分析にならないよう、オープンコーディングとKJ法でのカテゴリー化を用いている。データによって個人が特定されないような倫理的配慮もなされている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文の総合分析では、複数の質的研究から抽出された児童の体験と自己変容の性質を、ジョンストンのインプロの理論にある自己検閲の概念を枠組みにして再分析する。否定的な主観的自己評価はジョンストンの理論では自己検閲であり、それを緩和していたのがジョンストンの理論で言うところの「利他性」と「失敗の価値の転換」であると、児童の体験と自己変容の性質を整理した。また、そのためには授業者がファシリテーターとして、系統的脱感作的手法を用い、即興的にカリキュラムをつくっていくことが必要であることも明らかにした。この考察と結論は実践的な感覚に沿いつつ、研究的にも十分に高められており、学術的な水準に達している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、これまでほとんどおこなわれてこなかった小学校高学年でのインプロの授業の実践研究である。この研究で、小学校高学年の児童に特有の自己検閲の姿や、授業者が取り得る実践上の工夫などが明らかになった。これは端緒についたばかりのインプロ教育研究に大きな前進をもたらす研究的な意義がある。

また、本論文では、非認知能力を「高い・低い」「できる・できない」といった狭い枠で捉え、教師が児童のこれらの能力を高めることに躍起になる現代学校教育の構造上の陥穽に言及する。そして、インプロの授業はそれぞれの児童の気づきを重視し、学校教育の前提構造を問い直すものであると述べる。また、否定的な主観的自己評価は個人の問題であるだけでなく、関係性や学級コミュニティの問題でもあり、インプロが利己的で失敗に不寛容な現代学校教育の価値観を相対化し、児童同士の関係性や教師の児童の見方を変え、学級文化の変容を促す作用を持つことを指摘している。

インプロを用いた小学校教育実践は、インプロのゲームが複数の国語教科書で単元として採用されるなど拡大傾向にあり、これから多くの教師や外部指導者が学校でインプロを用いた授業をおこなうことが予想される。その際、インプロが能力や技術を高める効果的技法として表面的に用いられることへの危惧もある。本論文は、今後、小学校でインプロの授業を適切におこなうための示唆に富む大きな実践的な意義も持っている。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員が一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与に相応しいと評価した。